

松野殿御返事

建治三年九月九日 五六歳

鷺目一貫文・油一升・衣一つ・筆十管給ひ候。

今に始めぬ御志、申し尽くしがたく候へば法華經・釈迦仏に任せ奉り候。先立ってより申し候、但在家の御身は余念もなく日夜朝夕南無妙法蓮華經と唱へ候ひて、最後臨終の時を見させ給へ。妙覺の山に走り登り四方を御覽ぜよ。法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし、^{こがねのなわ}金繩を以て八つの道をさかひ、^{そら}天より四種の花ふり、^{こくう}虚空に音楽聞こえ、諸仏菩薩は皆^{じょうらくがじょう}常樂我淨の風にそよめき給へば、我等も必ず其の数に列ならん。法華經はかゝるいみじき御經にて^{御座}をはしまいらせ候。委細はいそぎ候間申さず候。恐々謹言

九月九日

日 蓮 花 押

松野殿御返事

追って申し候。目連樹十両計り給ひ候べく候。